

答え合わせ・解説

問1	答え 1 御恩	鎌倉幕府の基盤は、将軍と御家人の間の土地を通じた契約関係にありました。将軍が御家人の領地を保証する「本領安堵（ほんりょうあんど）」や、戦功に対して新しい領地を与える「新恩給与（しんおんきゅうよ）」をまとめて「御恩」と呼びます。これに対し、御家人が軍役や京都・鎌倉の警備を行う義務を「奉公」と言い、この双方向の関係が幕府を支えました。
問2	答え 1 臨済宗	栄西が宋から伝えたのは臨済宗です。鎌倉時代には日宋貿易を通じて新しい仏教が日本に流入しましたが、臨済宗は特に幕府との結びつきを強め、後の五山文化の発展にも寄与しました。浄土宗は法然、浄土真宗は親鸞、時宗は一遍が開いた宗派であり、これらは念仏を唱えることで救われるとする教えで、禅宗とは特徴が異なります。
問3	答え 1 将軍が武士の領地支配を保障する代わりに、武士は幕府に対して軍役や番役などの義務を負った。	鎌倉幕府の武家政治は、将軍と御家人の間の「御恩」と「奉公」という主従関係によって成り立っていました。将軍が武士の土地所有権を認める「本領安堵」などの恩恵を与えることで、武士たちは幕府のために戦うという強い結束力が生まれ、武士による安定した統治が可能となりました。
問4	答え 1 一遍	一遍は、鎌倉新仏教の一つである時宗の開祖です。彼は特定の寺院にとどまらず、日本各地を歩き回って念仏を勧める「遊行（ゆぎょう）」を行い、踊りながら念仏を唱える「踊り念仏」を通じて、文字の読めない庶民層にも分かりやすい形で信仰を広めました。
問5	答え 1 同じ土地において、1年のうちに米とそれ以外の作物を組み合わせて2回栽培すること。	二毛作は、灌漑（かんがい）技術の向上によって土地の水分調節が可能になったことで広まりました。鎌倉時代には、主に夏の米の裏作として、冬に麦などが作られました。これによって土地を効率的に利用できるようになり、食料生産が大幅に増加しました。1年に2回同じ作物を育てることは「二期作」と呼び、二毛作とは区別されます。
問6	答え 1 源氏の将軍が途絶えた後の幕府の混乱を見て、後鳥羽上皇が政治の実権を取り戻そうと挙兵した。	鎌倉幕府の3代将軍・源実朝が暗殺され、源氏の正統が途絶えたことで幕府の結束が弱まったと判断した後鳥羽上皇は、倒幕の宣旨を下しました。しかし、北条政子が「頼朝の恩義」を御家人たちへ訴えたことで幕府側が団結し、上皇側は敗北して隠岐に流される結果となりました。
問7	答え 1 執権	源頼朝の死後、幕府の実権は頼朝の妻である北条政子の実家、北条氏へと移りました。北条氏は「執権」という役職に就き、形式的な将軍を支えながら、事実上の幕府の最高責任者として政治を動かしました。管領は室町幕府で将軍を補佐する職名であり、連署は執権の補佐役、六波羅探題は朝廷の監視などを行う地方官職です。
問8	答え 1 幕府を支持する御家人が東日本に限定されていた状況から、乱の勝利によって没収した領地に地頭を任命することで、幕府の支配力が西日本を含む全国へ広がった。	承久の乱の前まで、幕府の勢力は主に東日本を中心としていましたが、乱の結果として上皇側から没収した3000力以上の所領に新補地頭を任命したことで、その支配力は西日本まで一気に拡大しました。この西国支配の拠点として機能したのが六波羅探題です。
問9	答え 1 元寇での軍役負担により生活が苦しくなった御家人のため、売却・質入れした土地を無償で取り戻させた。	元寇は外国からの侵略を退ける防衛戦であったため、幕府は新たに獲得した土地を御家人に恩賞として分配することができませんでした。多額の軍費を自ら負担した御家人たちは借金を抱え、土地を質入れしたり売却したりして生活をしのいでいたため、幕府はそれらの土地を返還させることで御家人の基盤を維持しようとした。